

第3 問題作成部会の見解

世界史 A

1 問題作成の方針

平成29年度の「世界史A」の問題作成に当たり、問題作成部会は以下のような三つの方針にのっ
とった。

- (1) 高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）への対応

諸地域世界の形成と地域間の交流を主題に据えるように意識し、近現代史における政治・経
済・文化のグローバルな結び付きに留意して作題した。

- (2) 現教育課程教科書の特色を踏まえた出題

「世界史A」の各教科書は、共通コンセプトに従いつつも、取り上げる主題や内容に独自色を
濃くし、それぞれの個性を強めている。こうした教科書の多様性を考慮しつつも、どの教科書で
学んだ受験者にも理解し得るリード文と設問を心掛けた。

出題範囲と形式については、平成19年度からの方針として、「世界史B」との共通問題を廃止
し、「世界史A」固有の問題を作成した。問題数については、昨年と同様に大問を4問、小問を
33問とした。

- (3) 学習指導要領・教科書に沿った基礎的・基本的内容を中心としつつも、受験者の思考力を問う
問題の作成に努めた。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問

第1問は、イギリス帝国の叙勲制度、オランダの東南アジアにおける植民地建設、スペイン
によるアメリカ植民地の宗教的側面を取り上げ、世界史上の植民地の形成と拡大、及びその支
配の在り方についての意義を理解させることを目的に作問した。

Aでは、19世紀・20世紀のイギリス帝国とその叙勲制度を題材として、世界史上の帝国の
多様性と支配、インドの歴史、イギリス帝国の変容と自治領の成立を理解させることを目的に
作題した。正答率は問1が高かったものの、インドについて問うた問2はやや低めであり、問
3は年表を扱った問題であるため全般的にかなり低かった。

Bでは、オランダの東南アジアにおける植民地建設を取り上げ、東南アジアにおける各王朝
の成立について問うとともに、植民地経営と本国が互いに経済的関係をもったこととその後の
経済に及ぼす影響を理解させることを目的として問いを作成した。正答率は問6と問8がやや
低く、問7はかなり低かった。識別力はいずれも高かった。

Cでは、スペインによるアメリカ大陸支配の宗教的側面を題材として取り上げ、これと関連
して、世界史上の植民地支配体制について理解させることを目的に作問を行った。正答率は問
7が約5割、問8及び問9が4割前後であった。問題の識別力は問8が比較的lowだったもの
の、一定の判別力は備えていたと判断される。

第2問

第2問では、近世朝鮮と日本との関わり、19世紀における日本の西欧文明受容、20世紀中
国と日本との関わりを取り上げ、日本と世界との関わりとそれに関連する国内政治・国際関係
の変容などを理解させることを目的に作問した。

Aでは、朝鮮王朝で作成された『海東諸国紀』を題材として取り上げ、これに関連して、朝鮮半島の歴史と同時代の東アジア史の展開過程、日本と朝鮮との関係について理解させることを目的に作問を行った。問1、問2、問3とも正答率は低調であり、問1と問2は中上位以下の層は識別力が低く、問3に関しては他に比すればやや識別力が高かった。

Bでは、江戸時代日本の西洋の情報受容を題材に、地動説の提唱者、海底電信ケーブル敷設、同時期のヨーロッパの政治状況、浮世絵の影響を受けた印象派画家について問い、情報・文化の相互作用と世界の中の日本の位置付けを理解させることを目的に作問した。正答率は、問5は低く、問7が高かったが、B全体ではおおむね妥当なものとなった。

Cでは、中国河北省の熱河・避暑山荘を題材として取り上げ、清帝国の文化的多様性と20世紀における日本と中国の関係について理解させることを目的に作問を行った。

正答率は、問9は比較的高いが、問8と問10も4割台後半で、3問とも問題の識別力は高く、適切な出題であったと考える。

第3問

第3問は、ヨーロッパ社会において宗教（キリスト教）がもたらした政治的・文化的影響を理解させるために作問した。

Aでは、中世ヨーロッパにおいて聖俗が分かち難く結びついており、宗教的な身分観が長く影響を持ち続けたことを理解させるために作問した。同時に、近代における労働者と国家政策について考えさせることで、中世的な身分観が克服されていくさまを理解させることを目的に、問いを作成した。正答率は問1が4割、問2が3割、問3が4割ということで、問2が若干難しかったようである。

Bでは、芸術におけるムスリムの表象を通して、ヨーロッパ人の対イスラーム認識を考えさせることを意図して作問した。正答率は問4が3割、問5が4割、問6が3割、問7が3割となっている。

第4問

第4問は、ヨーロッパ統合とアメリカ合衆国の外交を題材とし、20世紀後半以降の国際関係の展開について理解させることを目的として作問した。

Aでは、ヨーロッパ統合を題材として取り上げ、20世紀以降の国際社会の動き及び、特にヨーロッパにおける地域統合についての理解を問うことを意図して作問した。3問の小問のうち、問1の正答率は3割以下だったが、問3の難易度は中程度であり、問2は難易度が比較的低かった。

Bでは、第二次世界大戦後の「冷戦」をテーマとし、これに関連して第二次世界大戦後の紛争や国際関係、また国家間の対立や国家の統合・再編を取り上げ、これらについての理解を問うことを目的にして作問した。正答率では問4と問7が高く、問5と問6がやや低かった。

3 出題に対する反響・意見についての見解

第1問

Aの場合、年表を使用した問3については、オーストラリア連邦の成立年代を問うのは難解との指摘があった。

問4は「世界史A」の大項目に沿った適切な良問であると評価を得た。また、問6についても、植民地政策と現在の状況を結びつける理解を問う良問であるという評価を得た。

Cでは問8について、ムラートという用語の意味でなく、歴史的な内容を含んだ作題に努めるべきとの指摘を受けた。しかし、ムラートの意味は大半の教科書において説明されているた

め、おおむね適切な問題だったと考える。

第2問

本問は、世界史学習指導要領でも重視されている、日本と世界との関わりを取り上げたものであり、過去には設問や小問でしか取り上げられなかった「世界と日本の結び付き」というテーマが、第2問全体にわたって扱われたことは、学習指導要領における科目の目標をより意識したものとして評価できる、との高い評価を得た。

正答率、問題の識別力も総じて高く、大きな問題はなかったと考える。

Aでは、問2に関して、漢王朝と明王朝の最大領域を比較する問題は、中国東北部が含まれるかどうか判断の基準となるが、やや難しい、との指摘を受けたが、正答を導く上で支障となるような問題点はなく、内容は適当であったと考える。

Bでは、問7の浮世絵と印象派画家を問う問題が、世界と日本のつながりを問う良問と評価された。海底電信ケーブル敷設時期を問う問5は正答率が低いことに課題があると指摘されたが、インターネット時代において、通信の歴史に対する関心を喚起することは重要であるため、今後も工夫を重ねていきたい。

Cでは、特段の問題、意見は寄せられなかった。難易度などおおむね適切だったと考えられる。

第3問

Aでは、問2に関して、正解となる国立作業場の設立は、「世界史A」では細かい内容であり、世界史Aの学習指導に照らして、難しかったのではないかと、との意見をいただいた。教科書類度の捉え方も含めて、この点は今後の作題に当たっても引き続き留意していきたい。

Bでは、特段の意見は寄せられなかった。作問に関する問題は特になかったと思われる。

第4問

Aでは、特に問3（ヨーロッパ連合につながる統合の流れに関する並び替えの問題）について、現代世界の動きを意識した世界史Aの趣旨に沿った出題であり、適切な問題であったと評価する意見をいただいた。

Bでは、問7の選択肢のうち、東ティモールの独立は地図に掲載されているのみであってやや細かく、ペロポネソス戦争は掲載されている教科書が少ない上に、内容が誤っているものを選択させる問題となっており難しい、との指摘があった。問7については、識別が有効であり、適切な問題だったと考えるが、今後の出題に当たっては留意したい。

4 今後の問題作成に当たっての留意点

以上、問題作成部会として、各問の出題意図と、設問に対して寄せられた意見・評価に対する見解を述べてきた。最後に総合的な意見・評価についての問題作成部会の見解を述べ、今後の問題作成に当たっての留意点についてまとめておきたい。

まず、大問四つのいずれも学習指導要領の趣旨に沿い、教科書の内容をきちんと踏まえた出題がなされているとの評価を得た。その上で、多様な観点からの出題がなされていて良かった、との評価も得た。これは今後の作問においても、遵守すべきことであり、留意していきたいことである。また、小問は昨年同様に33問とした。これに関しては妥当であるとの評価を得ている。今後も踏襲していきたい。

出題のバランスについては、地域的には「ヨーロッパ・北アメリカ」がやや多いものの、バランス良く出題されている、との評価を得た一方で、時代的には近現代史が33問中19問と昨年度から現代史が減少し中世史・近世史がやや増加した点の指摘がなされている。また、大問で「世界と日

本の結び付き」というテーマが扱われたことは、学習指導要領における科目の目標をより意識したものとして評価を得ている。日本を含む世界の歴史の複合性や関連性を理解する力を問うという意図が評価されたものと思われる。「世界史A」の目標・趣旨をきちんと踏まえ、今後も偏りが無い出題に努めていきたい。

リード文については、大問や小問のリード文がよく工夫され、興味深く読ませる内容であり、受験者の世界史への興味・関心を刺激し、考察の視点を提供するものであった、との評価を得た。また、全体としてリード文と出題との関連性がより改善されている、との評価も得ている。以前に比べてリード文と設問との乖離かいりが見られる問題を減らしていこうという努力が評価を得たと思われる。今後も引き続き努力したい。

また、出題形式に関しては、学習指導要領の趣旨に沿い、おおむね教科書の内容を踏まえた出題がなされている、との評価を得た。文章の正誤判定だけでなく、グラフを読み取らせたり、事項の起こった時期を並び替えさせたりするなど、思考力や判断力が必要な良問もいくつか見受けられた、との評価も得ている。資料等の根拠に基づいて論理的に思考する力を問う、という方向性が評価されたものと思われる。今後も、歴史的思考力を引き出すための形式による出題の工夫により一層努めていきたい。しかし、一方で配慮・工夫を要する設問についての指摘もなされている。それらを踏まえ、より良い問題を作るべく、努力を続けていきたい。

世界史 B

1 問題作成の方針

平成29年度の「世界史B」の問題作成に当たり、問題作成部会は次のような四つの基本方針にのっとった。

(1) 高等学校学習指導要領への対応

高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）は、諸地域世界の形成と諸地域間の交流を主眼とし、特に近現代における世界の一体化の展開を念頭に置きつつ、日本の歴史を近現代の世界の形成過程と関連付けることを重視している。問題作成に当たっては、この学習指導要領への対応を考慮し、地域間交流や世界の一体化について思考させ、特に日本を含めた近現代世界への理解を深めるように出題を工夫した。

(2) 現教育課程教科書の特色を踏まえた出題

「世界史B」のいずれの教科書においても、図版・図表を活用したヴィジュアルな資料提示が工夫され、諸地域の形成と交流、そして近現代の世界の一体化が重要な主題とされているが、「世界史A」と同様に、内容については独自色が濃くなっている傾向が見られる。問題作成に当たっては、これらの教科書の多様な記述を踏まえて、特定の教科書で学んだ受験者に有利不利のないようにリード文や出題を工夫しつつ、歴史の幅広い基本的事項を問うようにした。また、地域間の連関や地理的知識も問い、歴史的事象の総合的な理解を受験者に求めた。

(3) 出題範囲と形式

問題数（大問4問、小問36問）と形式は前年までのやり方を踏襲した。学習指導要領の趣旨に沿って、出題範囲は世界の各地域と各時代をできる限り網羅し、さらには政治史・経済史・文化史のバランスを考慮し、かつ教科書の範囲内で、基本的事項を問うように努めた。難易度に関わる方針は特に変更はなかった。

(4) 学習指導要領・教科書に沿った基礎的・基本的内容を中心としつつも、思考力を問う問題の作成に努めた。

2 各問題の出題意図と解答結果

第1問

第1問では、世界史上の宗教・民族マイノリティ（少数派または被支配集団）に関わる諸事象を題材とした。エジプトにおけるキリスト教マイノリティ（コプト教徒）教会、南アジアにおける多数派のヒンドゥーと少数派のムスリム、そしてロシアに移住したドイツ人を取り上げ、マイノリティに対する国家の政策や、多数派と少数派の関係を考えさせることを目的として問いを作成した。

Aでは、キリスト教の異端、特にコプト教徒をテーマとし、これに関連して地中海地域のキリスト教諸国の動きやアフリカの歴史を取り上げ、これらについての理解を問うことを目的にして作問した。正答率は問1が低く、成績上位群を除く中下位群、最下位群で特に低かった。問2は平均的、問3は非常に高かった。

Bでは、中世インドにおけるヒンドゥー教徒とムスリムの共存を題材に、前近代における異文化コミュニティ間の多様な関係を理解させることを目的に作題した。問4では、年表を用いて全インド＝ムスリム連盟の結成時期を問うている。問5はムスリムの君主の事績についての正文選択問題、問6は海上交易についての二事項判別問題である。正答率は問4と問6は平均

的で、問5は全体的に高かった。

Cでは、ロシアのマイノリティ（ロシアに移住したドイツ人）がロシアの近代化に果たした役割や世界大戦の時代に受けた迫害を取り上げ、ロシアの歴史やマイノリティに対する国家の政策について考えさせることを意図して出題した。問7及び問8の正答率は標準的で、問9は比較的低かった。3問とも成績下位層と中上位層との差異がある程度明確になっている点で、一定の識別力は備えていたと判断される。

第2問

第2問は、フランス革命、ロシア革命、中国革命を取り上げ、各地域における革命や政治体制の変革について理解させることを目的に作問した。

Aでは、フランス革命の成果として、政治権力の恣意性を制限する立憲主義と民意を反映させる議会の歴史を取り上げ、中世～近代におけるその成立過程と世界への広がりを理解させること、また、それらが極めて現代的な問題であることを想起させることを意図して出題した。正答率は問1と問2が比較的高く、問3はやや低くなった。

Bでは、ミハエル＝ロストフツェフの『ローマ帝国社会経済史』に対するロシア革命の影響を題材として取り上げ、これに関連して、世界史上の革命や政治体制の変容について理解させることを目的に作問を行った。問1と問3の正答率は6割程度であったのに対し、問2の正答率は8割程度で難易度は若干低かったものの、いずれも識別力の高い問題であった。

Cでは、中国革命を題材とし、20世紀前半におけるその政治体制の変化を問うとともに、20世紀後半における政治の民主化の実現という現代世界の課題を、より広い視野で考えさせることを意図して作問した。問7と問8は、正答率、識別力とも妥当であったが、問9は正答率が低く、②と④との識別力も低かったため、やや難問であったと言える。20世紀後半の現代史に関する十分な学習を要求する問題であったが、問いかけや選択肢の内容をより一層洗練させるよう、今後も努力していきたい。

第3問

第3問は、国家や支配者が国や領地を治めるに当たっては、統治制度や理念、国を支える様々な仕組みが必要とされることを理解させるため、中国、西アジア（イスラーム世界）、ヨーロッパを取り上げ、財政、徴税、軍制、思想など、支配体制の在り方を幅広く問う設問とした。

Aでは、イスラーム国家の統治体制を題材に取り上げ、これに関連して、国策としての探検、思想・言論統制の歴史的展開、各国での土地徴税制度の相違を理解させるために作問した。正答率は問1が平均的で、問2が約8割と高く、問3の正答率は低かったが、いずれも識別力は高かった。

Bでは、大運河を通じた運輸制度により南北中国が経済的に結合される過程を題材に、生活環境の異なる地域が政治制度を媒介にして統合されていく歴史を理解させることを目的として作問した。正答率は問4と問6が高く、問5が平均的であった。

Cでは、中近世ヨーロッパにおける軍事制度の変化を題材とし、世界史上の貨幣制度、軍事制度、統治制度を理解させることを目的に設問を作成した。問7～9の正答率はそれぞれ約6割、8割、6割となっており、識別力はいずれも高かった。

第4問

第4問は、アメリカ大陸の銀の開発と資源をめぐる争い、東南アジアにおける海洋交易、ヨーロッパの森林資源活用を取り上げ、世界史における自然環境や自然資源と人間との関わりについての意義を理解させることを目的に作題した。

Aでは、征服後のアメリカ大陸における銀鉱山の開発と、その富を巡ってのヨーロッパ諸国の動きを題材として取り上げ、これに関連して、世界史上の資源の開発・流通について理解させることを目的に作問を行った。正答率は、問1が7割半ば、問2が8割半ば、問3が7割程度であった。問1は地図を用いた組合せ問題だったが、問題の識別力は高かった。

Bでは、東西交易を取り上げ、交易と文化や技術の伝播についての理解を促し、人間の歴史における海洋という自然環境の重要性に注意を向けさせることを目的として作問した。正答率は、問4と問6はやや高く、問5はやや低かった。識別力はおおむね適当であった。

Cでは、森林とその資源利用、そして人間との関わりについて歴史的思考を試すことを意図して作問した。正答率は問7が中程度、問8はやや高く、問9はやや低かった。識別力はおおむね適当であった。

3 出題に対する反響・意見についての見解

第1問

Aについて、全体として難易度は標準であるとの評価を受けた。問1について、公会議についての正確な知識がなければ難しいとの評価であった。また、カタリ派やアルビジョワ十字軍はなじみが薄いですが、①～③の選択肢が基本的な内容なので容易に解答できるとの意見が出された。問2については、地理的理解も必要なので、やや難しいとの指摘がなされた。正誤判定の要素が他の問題よりもやや細かいので、差がつく問題であったとの見解が示された。

Bに関しては、問4について、インド独立運動の全体的な流れを問う良問との評価を得た。問5は基本的事項で平易と評価された。

Cのうち、問9についてはやや難しいとの評価を受けたものの、全体的には基本的かつ判別が容易との評価を受けた。今後とも踏襲していきたい。

第2問

Aでは、問1がやや易しかったようだが、問2、問3とも、基本的事項に関する出題との評価を得た。

Bでは、いずれの問題とも基本的な事項について問うたものと評価された。難易度はいずれも標準的だったとされており、適切な出題だったと考えられる。問6は、リード文から下線部の「故国」がロシアであることを判断し、ロシア革命について述べていない文章を選ぶという2段階の思考が必要な問題であり、このような工夫された問題がこれから増えてくれば良い、との評価を受けた。

Cでは、問7ではメキシコ革命に関する正確な知識が問われており、受験者によっては差がつく問題であったとの意見を、問8では国民政府の時期の中国について正確な理解が求められた問題であったとの意見を、問9では基本的な内容であるが戦後史まで学習が及んでいない受験者にとっては苦勞する問題であったとの意見をそれぞれいただいた。総じてやや難しい問題であったと思われるが、受験者に戦後史に関する基本的事項の学習を要求することはできたと考える。

第3問

Aでは、いずれも基本的事項であるとの評価があった一方、問2は現行課程で重要視されている日本史との関係を問う良問であるとの高評価を得た。問3は、学習が及びにくい分野からの出題であったと評価されたが、識別力は決して低くはなかった。

Bでは、問4と問5は基本的事項を扱う問題とされ、問6は容易に判断できる問題との評価を得た。地図を用いた問4については、地理歴史科の科目間の関連を重視する学習指導要領の

趣旨に沿ったもの、との高評価を得た。

Cでは、問8～9については基本的事項に関する問題だと評価された。問7については正しい理解が求められると評価されたが、正答率が6割だったことから適切な内容であったと判断する。

第4問

Aは、地図を用いた問1、二項識別問題である問2、正文選択である問3いずれも、基本的事項であるとの評価を受けた。いずれの正答率も7割を超えており、適切な難易度であったと考える。今後ともに踏襲していきたい。なお、問2の選択肢の「イ」のフエについて、(ユエ)と括弧書きがあった方が良いと思われる、との指摘をいただいた。今後の作問に当たっては、留意していきたい。

Bの問4については、基本的事項を問う問題との評価を得た一方、単純に人名を覚えているだけではなく、その思想の内容まで問われていたので、文化史が手薄になっていた受験者は取りこぼしがあった可能性があるとの指摘も受けた。問5についても、基本的事項を問う問題という評価に対し、チャンパーの名称と位置を答えるのはやや難しく、受験者によっては差がつく問題であるとの指摘を受けた。また問6については、基本的事項を問うもので、解答を容易に判断できるとの評価を得た。

Cでは、問7について河川や水路の整備・開発について、世界史の大局的な流れを考察させる良問であるとの評価を得た。また問8については、①③④が誤りであることが容易に判断できる簡単な問題との評価を得た一方、サハラ以南のアフリカの歴史についての習熟度を問う問題との評価も得た。問9については、近代文化史についての正確な理解が必要な難問であり、文化史は受験者が手薄になりがちな分野であり、偏りのない学習を要求される問題との評価を得た。難易度の問題についての指摘など、今後の参考としたい。

4 今後の問題作成に当たっての留意点

以上、問題作成部会として、各問の出題意図と、設問に対して寄せられた意見・評価に対する見解を述べてきた。最後に総合的な意見・評価についての問題作成部会の見解を述べ、今後の問題作成に当たっての留意点についてまとめておきたい。

まず、大問四つのいずれも、学習指導要領の趣旨に沿った、基本的事項を中心にしたもので、教科書の内容を理解していれば十分に対応可能、との評価を得た。これは今後の作問においても、遵守すべきことであり、留意していきたいことである。また小問は昨年同様に36問とした。これに関しても適切であるとの評価を得ている。今後も踏襲していきたい。

出題のバランスについては、地域別では「西アジア・アフリカ」が増加した一方で、「西欧・北米」が減っていることで、例年に比べてよりバランスがとれた内容になっている、との評価を得た。分野別では「文化史」が減少し、時代別には「中世史」「現代史」の割合が高かったとの指摘を受けている。また、出題範囲と選択科目間の得点バランスが非常によく考慮されていて良いとの評価も得た。今後も引き続き偏りのない出題をしていきたい。

リード文については、テーマが多岐にわたり、いずれも現在の世界情勢と関連する示唆に富んだものである、との評価を得た。ただ、リード文で問題に十分に活用されているとは言い難いものがあるとの指摘も受けている。今後の作題に当たっては十分に留意していきたい。

出題形式・内容に関して、単に知識を問うだけではなく、歴史事象を世界史の大局的な流れに位置付け、相互に関連付けて考察させる工夫がなされている、との評価を得た。特に、地図を用いた地理的理解を問う問題が増えていることについては、地理歴史科の科目間の関連を重視する学習指

導要領の趣旨に沿ったものである、との評価を得ている。学習指導要領の趣旨に沿った基本的な問題を作問することは、極めて重要である。ただし、掲載した写真・絵画やグラフなどの資料が問題に十分に活用されているとは言い難く、配慮・工夫を要する設問についての指摘もなされている。高等学校の教育現場での利用も意識しつつ、今後も、より一層思考力や知的推論を働かせて正答を導き出すような問題作成に努めていきたい。